チェア・ブン・ケン著

『マラヤをおおった赤い星』

Cheah Boon Kheng, *Red Star over Malaya: Resistance and Social Conflict during and after the Japanese Occupation of Malaya, 1941～1946*, シンガポール, Singapore University Press, 1983年, xvii＋366ページ

I

標題は，1945年8月の日本軍降伏から英軍統治機構確立までの政治的空白期に，「赤い星」つまりマラヤ共産党とその指揮下のマラヤ人民抗日軍がほぼ全マラヤ（マレー半島およびシンガポール）を実質的支配下においたことを暗喩している。著者によれば，この空白期にマラヤ各地で起きたマレー人・華人間の衝突は1969年5月13日の人種暴動よりはるかに大規模かつ深刻なものであったにもかかわらず，いやむしろそのゆえにこそ，人々は恐怖のあまりかたくなに口を閉ざしてきた。個々の衝突事件についての研究は，近年主にマレー人学生によって手がけられるようになったが，マラヤ全域にわたる包括的な研究は皆無だったという。著者は「(歴史の分水嶺ともいうべき）この決定的な時期に起こった，マレー人・華人間の命懸けの社会的・政治的闘争を把握して初めて，マラヤの戦後の政治・社会を理解できる。今日のマレー人の政治上の優位性も1945年のできごとと結びつけてのみ理解できるし，マレー人の共産主義嫌いも主にこの時期に淵源をもつ」（序文）との認識に立って分析にとりかかる。

著者の目的意識は，単に人種対立の淵源を探るだけでなく，分析のなかからそれを克服する鍵を見出すことに置かれる。なぜなら，「人種間の調和と協力は，過去から眼をおおうことでなく過去の教訓から学ぶことによって強化されるからである」(同)。自らが華人であることを自覚する著者は，人種問題というこの微妙な問題を扱うにあたって，できるだけ客観性を心掛けたが，批判は華人に向けられがちになったという。華人がマレー人を批判しては，人種調和を説く声は反発を以て迎えられるにすぎないことを，著者は知悉しているのである。全編を貫く著者のこの真摯な姿勢は，本書をきわめて説得力あるものにしている。この時期を扱った記録はこれまで華人，マレー人，イギリス人，日本人の手で数多くものされているが，いずれも自己の正当化と他者への責任転嫁を図るものであった。イギリス，日本にも赴いてこれらの厖大な記録をひもとき，透徹した，かつ目的意識をもった客観的な眼で検証した結果生まれたのが，本書である。マレーシア，日本，イギリスなどで行なった往時の関係者多数からの聴取り調査の結果も，随所に生かされている。その意味でも，本書は貴重な労作である。

II

本書・本論の構成は次のとおりになっている。

第I部　対立の根源
　第1章　1941年におけるマラヤの複合社会
　第2章　日本のマラヤ占領がもたらした社会的影響——1942～45年
　第3章　マラヤ共産党と抗日運動
　第4章　マレー人独立運動
第II部　戦後マラヤに向けての抗争——1945～46年
　第5章　降伏後の空白期
　第6章　抗日ゲリラの権力掌握
　第7章　恐怖政治
　第8章　マレー人・マラヤ共産党・華人の対立
　第9章　共産主義者と英軍政の対立
　第10章　マレー人とイギリスの対立
　第11章　結論

以下，各章ごとに要点を記す。

第1章：　華人の眼は中国を，インド人の眼はインドを向き，民族主義運動は本国の運動の一部であって，マレー人でさえインドネシアの民族主義運動との一体感が強かった。そのため各人種間の接触はまれで，対立が公然たる衝突に発展することはなく，また「マラヤ」意識も生まれなかった。

第2章：　日本軍は当初マレー人非エリート（マレー青年同盟KMM）をその反英性のゆえに利用したが，やがて伝統的マレー人エリート（貴族層）を重用するようになった。ただし，スルタンはイギリス期以上に名目的な存在となった。華人エリートの一部は国外に脱出し残留者の多くは日本に協力したため，急速に威信を失い，代わって抗日ゲリラが勢力を伸ばした。

日本軍が親マレー・反華政策をとった結果，マレー人・華人間の溝が深まり，マレー人大衆と圧政機構の末端に

あるマレー人エリートとの対立は表面化しなかった。

第3章：　マラヤ共産党（以下，マ共と略す）と同党指揮下のマラヤ人民抗日軍（1942年結成。以下，抗日軍と略す）とは，ともに華人中心の組織だった。マ共の中国指向とマレー人問題の無視とは戦後の1946年9月まで続いた。1943年末ごろには日本は北部4州をタイに割譲するなどマレー人の利害を損うことが多くなり，マ共・マレー人間の関係は改善されたが，マ共がゲリラに加わったマレー人を白眼視したこと，マレー人官吏を殺害したことで，再び関係は悪化した。

第4章：　戦況が不利になった1944年，日本軍は，42年6月に解散させたKMMの再利用を図って義勇軍を組織，ゲリラ鎮圧に出動させた。裏面で義勇軍・抗日軍提携への手探りもあったらしいが，実を結ばなかった。KMMは，そのあまりのインドネシア指向のゆえに一般マレー人の反発を買った。

第5章：　日本軍降伏とともにKMMの指導者イブラヒム・ヤコブ(Ibrahim Yaacob)はインドネシアに逃れ，義勇軍は解体された。蔣介石軍上陸の噂に意を強くした華人は排外的かつ傲慢になった。抗日ゲリラがジャングルから出て各地の市や町に入り，地方官吏，警官（ほとんどがマレー人），「漢奸」など対日協力者を「人民裁判」にかけて処刑した。これに対しマレー人が反発し，ジョホール，マラッカなどを中心にマラヤ全域でマレー人・華人間の凄惨な衝突が起きた。

第6章：　イギリスの方針は，「抗日ゲリラの武装解除が最大目標だが，当面彼らを指揮下におけないので，反英にせぬよう，また抗日軍との提携破棄を期していることを見破られぬよう対処する」といったものだった。英軍内には，勝利に貢献した抗日軍に誠意をもってあたるべきだ，との意見もあって，必ずしもはっきりした処理方針をうち出せず，それが抗日軍の各地占拠を容易にした。

第7章：　華人主体の抗日軍の各地占拠は，ケダ，パハンなどで136部隊傘下のマレー人抗日勢力（Askar Melayu Setia, Wataniahなど）との衝突をもたらした。抗日軍が樹立した各地の「人民権力」にもマレー人は参加しなかった。

第8章：　日本軍占領下で抗日軍はマレー人村落に入って金品を徴集した他，モスクで豚を殺してマレー人に食わせたり，祈祷を禁止したり，「対日協力者」ばかりか抗日軍のマレー人隊員をも処刑したりした。マレー語小説には，華人「匪賊」の兇行にマレー人，日本人が協力して報復する場面さえある。事実かどうかは別として，抗日軍の行為がマレー人にそうした感情を抱かせたことは事実である。ジョホールではマレー人が回教指導者，導師を中心に「聖戦(Sabilillah)軍」を組織し，1945年5～7月には華人居住地を襲って多数を死傷させた。マ共文書や華語文献は「日本人がマレー人をそそのかした」としているが，敵対を生み出した責任はやはり抗日軍にある。

戦後，都市に入った抗日軍（クランタンでは国民党軍）は，「蔣介石軍上陸」，「イギリスはマレー人を処罰する」との噂で華人の意気があがるなか，マレー人への報復を行なった。これに対しジョホール（主にバト・パハ，ムアール），ペラ，クランタン，トレンガヌ，パハンなどでマレー人が「聖戦」を展開，華人数百名が死亡し，多数がより安全な大都市に避難した。「聖戦」は，スルタンや貴族が収拾に乗り出したこと，マレー人の主目標が「マラヤ連合」案（スルタン権限の縮小，非マレー人への対等な市民権，などを骨子とするもので，マレー人の反発を買った）反対に移ったこと，により，1946年3月には終熄した。

第9章：　東南アジア連合軍最高司令官マウントバテン(Mountbatten)など英軍内進歩派とライテクなどマ共穏健派との間で保たれていた協調は，1945年10～11月に各地で起きた「米，職よこせデモ」を契機にきしみ始め，46年2月15日の全国ストで決定的に崩れ去った。1947年3月にはライテクがスパイだったことを暴露されて逃亡した。

第10章：　KMMの流れをくむマレー人左翼政党「マレー国民党MNP」は，マラヤ連合案支持と大インドネシア主義（インドネシアとの統合を目指す）とのためにマレー人大衆の支持を失い，代わってダト・オン(Datuk Onn bin Jaafar)など伝統的エリート層が統一マレー国民組織UMNOを結成して政治の主導権を握った。マ共も華人も中国ナショナリズムのゆえに情勢を的確に把握できず，マラヤ連合にはさして関心を示さなかった。かくて1946年7月，イギリスはマラヤ連合案を撤回，マレー人エリートの指導権が確立した。

第11章：　マ共が新情勢への対応に失敗したのは，中国性をぬぐえなかったこと，新たな目標を設定できなかったこと，対日協力者への報復に執着したこと，党内が分裂していたこと，などによる。他方マレー人は戦後の窮状のなかで回教を結節点に団結し，マ共・華人，イギリスとの闘いで最終的な勝利者となった。マレー人が圧

迫に対して過激な暴力を用い，華人は一方的に譲歩するかひたすら自らの力を貯えて圧迫をかわす以外にない，という構造ができあがったかに見える。

KMMは日本，インドネシアに頼りすぎ，マ共はイギリスとの闘いを放棄して権力掌握の機を逸した。たとえ権力を獲得したとしても，ともに人種的団結の視点を欠いていたから，他人種からの反抗は必至だったろう。

華人の政治的挑戦が流血を招く事態は，1969年5月13日に再び繰り返された。1945～46年の衝突のなかから生まれたマレー人・華人・インド人間の「歴史的契約」＝連盟党が永くマレーシア政治の礎石たり得るか否かは，今後を見守るしかない。

以上が本書の要約である。

III

マ共の路線や，イギリス，日本，次いで再びイギリスのスパイとなった怪人物ライテクの役割などについては，さほどの新事実は記されていない。全巻の白眉は，マレー人と華人の衝突を丹念に追った詳細な分析である。ここでは，マラヤ大学，マレーシア国民大学学生が聴取り調査にもとづいてまとめた幾多の修士論文や当時の英軍情報などがふんだんに利用されている。われわれにとって容易に手にし得ない地域的研究および第1次資料の集大成であり，資するところ大である。

本書の指摘でわれわれは，マレー人・華人間の流血の衝突が終戦直後でなく日本軍政下の1945年初頭から起きたこと，マ共・抗日軍がマレー人対日協力者（地方官吏，警察）に報復したばかりでなく，マレー人の人間性そのものを辱しめた結果，逆にマレー人が報復行動に出たらしいこと，などを知って一驚する。著者は，戦中から戦後にかけてマレー人勢力の中心となったKMM，華人勢力の中心となったマ共・抗日軍のいずれも「マラヤ」意識がなく（これは時代の産物で，ある意味ではやむを得ない），互いに国内の他人種の立場を理解しようとしなかったことが，衝突をひき起こした原因と見，とりわけ直接かつ最大の責めを，上記のマ共・抗日軍のマレー人侮辱と長期的視野を欠いた執拗な報復行為とに帰しているようである。マレー人は他人種から迫害されると回教を結節点に一体化し，武力・暴力を用いて敵を倒す，との指摘は，教義解釈の相違から回教が全マレー人を打って一丸とする結節点たり得なくなった今日にも，妥当性を失わない。マレーシア政府にとって今やマ共より手ごわい存在となった原理主義運動 (dakwah) も，「より純粋な回教」を結節点としているからである。発端においては周囲の強大な勢力から追い詰められてやむなく生み出されたものとはいえ，彼我の力関係の逆転した今日，いまだに回教と武力で身構えて他者を拒む姿勢はどんなものかと，著者は訴えかけているかに見える。

英軍のマ共政策が一貫性を欠いた，との記述，とりわけ1945年8月23日に抗日軍の都市占拠を追認し（151ページ），9月4日に抗日軍を連合軍と認定し（166ページ），9月12日に抗日軍失効を宣言した（194ページ）との指摘は興味深い。しかし英軍内の保守派，進歩派ともマ共を窮極的には排除すべきだとの根本認識では一致しており，マラヤ連合案もそのための布石だったはずで，著者の見方はイギリスの諸々の局面でのマ共宥和策を額面どおり受け取りすぎたきらいがあると思うがどうだろうか。マ共が，硬軟とりまぜたイギリスの揺さぶり策に乗せられた，という側面も否定できないのである。

マレー国民党について著者は，マラヤ連合を原則的に支持したためにマレー人大衆が離反したと述べており（279，287ページ），この見方はストクウェル (Stockwell) のマラヤ連合に関する分析(注1)と同じだが，当時同党中枢にあったブスタマム (Boestamam) は，「即時完全独立を要求し，イギリス支配永続を狙うマラヤ連合案に反対した」と述べている(注2)。後の同党弾圧・非合法化を見れば，大衆離反・弱体化説は必ずしも当らないと思われる。

KMMやマレー国民党からUMNOに主導権が移行する過程の分析では，回教指導層と伝統的エリート層との関係がもう一つ不分明だった。

総じて本書からわれわれは，日本軍占領期と戦後の混乱のなかで，なにゆえに，いかにしてマレー人・華人間の対立が醸成され拡大したかを知り，両者が互いの立場を認めればそれは回避できたろうことに思い至る。著者が本書で目指したものは，十分に達せられたと言ってよい。

IV

著者はこの10余年来，すぐれたマ共研究を精力的に発表している。この蓄積あってこそ今回の労作が可能だったわけである。以下，旧著との比較をまじえながら問題点をあげてみたい。

著者はかつて，マ共が戦後対英武装闘争を放棄した理由を次のように列挙した。

(1) 蔣介石軍上陸の噂。
(2) 日本軍（第7方面軍）司令官板垣征四郎の徹底抗戦姿勢，あるいは「共匪」掃討方針。
(3) 軍事力不足。
(4) 国民党軍，秘密結社，マレー人との衝突の恐れ。
(5) コミンテルン，中共，英共の指示(注3)。
(6) ライテクがスパイだったこと(注4)。

今回の著書のなかでは著者は，上述のように，時期をややずらして「マ共が新情勢に適応できなかった理由」を探っているが，両者の関連は必ずしも明確でなく，6項目の妥当性を裏付けるものとはなっていない。6項目の多くは武装闘争放棄の真因たり得なかったのではないか。

まず蔣介石軍。蔣軍上陸の噂に抗日軍支持者を含む大多数の華人が沸き立ったことは，著者自身も認めている（46，128，129，224ページ）。しかも(5)の「中共の指示」とは統一戦線路線の勧告であり，現にこのあとマ共と国民党（マラヤ支部）とは共同で双十節を祝ったり（252ページ），マウントバテンに華人住民保護を要請したり（11月20日。236ページ）している。少なくともこの当時，マ共や抗日軍が蔣介石軍を恐れる理由はなかったはずである。

次に板垣。敗戦の翌16日朝，ベトナムの南方軍総司令部に呼び出された各方面軍司令官のうち，確かに板垣は当初抗戦派だったが，寺内寿一南方軍総司令官の「謹んで大命を受けそれぞれ終戦を処理し，日本軍特に兵士を1日も早く内地へ送還する努力をしていただきたい」(注5)との説諭を受け入れ，同日中にシンガポールに戻って隷下司令官を召集，「刻下の急務は終戦処理を円滑適正にし……有為の将兵を悉く故国に帰還せしめて祖国の復興に参与せし……むるにある」(注6)と熱っぽく「承詔」を説いており，「徹底抗戦」の意はなかった。また，「英軍には降伏するがマ共だけは殲滅する」などとは考えなかったしその態勢もなかったという(注7)。しかもマ共が武装解除に最終的に合意した11月1日（本書252ページによる。実施は12月1日）には，日本軍はとうに収容所に入れられ無力化していた。

マ共の軍事力については，それが英軍より劣っていたことは何人も否定できない。しかし権力側より優勢な軍事力を以て出発した革命闘争など古来存在したためしがない。しかも抗日軍は日本軍投降直後には全町村の70%を掌握したほどで（167ページ），兵力は英軍を苦しめるに十分だったはずである。

国民党軍（400人）も秘密結社も，7000人とも1万人とも言われる抗日軍に比べればとるに足りない勢力であり，マ共がそれらとの衝突を恐れたとは思えない。マレー人の報復行動がマ共に戦術見直しを迫っただろうことは，本書の詳細な記述から読み取ることができる。ところが，近代式武器をもった勢力は136部隊指揮下2組織（Askar Melayu Setia, Wataniah）のたかだか1000名程度にすぎず，他はパラン（山刀），クリス（剣）などの古来の武器をもつだけで，むしろ不死身の「呪術」で武装していた。マ共にとって，基本戦略を左右するほどの脅威になったとは思えない。少なくとも，武装解除・和平路線採択の最大の理由ではなかったろう。

また，外国共産党からの指示が8月末のマ共の対英協調路線決定と無縁だったことは，著者自身が認めている（97ページ）。

最後にライテクについて。著者は本書でも，スパイ・ライテクが党内における絶大な権力を利用して反対派＝対英武装闘争派を抑え，主人イギリスに好都合な協調路線を採択させた，と述べている（96～98，246～249，256～259ページ）。しかしいかなる独裁者といえども，党内にその路線を受け入れる素地がなければ党は動かせない。全党が採択した路線を一個人の利害に帰することはできないのである。その点，著者は強硬派をあまりに固定的にとらえすぎたきらいがある。たとえば著者は，日本軍降伏直後に強硬派指導者劉堯（Lau Yew。中央軍事委員会主任）がクーデターを主張したことは記す（96ページ）が，彼が12月1日の抗日軍解散式典で「武装組織……はもはや必要がない。……マラヤ人民の主要任務はイギリス政府が民主・自由の新マラヤを建設するのを助けることにある」(注8)と演説したこと，つまりこの時点では最大の強硬派も柔軟派に転じていたことには目をつぶっている。

卑見では，武装闘争放棄の最大の理由はマ共・抗日軍の中国性・中共性にあり，10余年来「祖国中国の民族解放闘争支援」を第1の目標として闘ってきたマ共にとって，日本が降伏し中国から駆逐された時点でこの闘争は終わったのではないか。著者は本書でしばしばマ共・抗日軍の中国指向，中華民族意識の強さ，マラヤ意識の欠如に言及している（15，68，252，296ページ）が「マ共は占領期に高まった華人の中華民族主義に歩調を合わせざるを得なかった」（290ページ）と，マ共の能動的・積極的中国指向説は否定する。しかしマ共の中国性が「新情勢に適応できない」理由だったことを認めておきながら

(296ページ)，武装闘争放棄の理由とは認めないのは，片手落ちというしかない。

著者はまた，マ共が1940年綱領でマラヤ華僑（馬華）と華僑とを使い分けていることを以て，マラヤ指向の萌芽ととらえている（69ページ）が，同綱領は「馬華の闘争の基本目標は祖国（つまり中国）抗日戦援助にある」と謳っており(注9)，馬華は単に華僑の一構成部分を意味するにすぎない。ここからマラヤ指向を読みとることは不可能である。

逆に著者は，マ共は戦前・戦中にはなんら人種・言語政策を発表せず(73ページ)，1945年8月27日発表の8項目綱領で初めて策定したかのように記している（98ページ)。また，1946年9月決定の行動計画で初めて党のマラヤ化を謳ったとも述べている（68ページ)。しかし実は，1932年綱領に「各本国語（マレー語，華語，タミール語を指す——引用者)による無償教育」，1943年綱領に「各民族語による普通教育を実施」，「各民族の普選による国家機構を作る」とあり，著者の見落としは明白である。またこの1943年綱領は初めて「祖国」をマラヤとし，「本国語」を「民族語」と呼びかえた点，つまり党のマラヤ化を明示した点(注10)で画期的だった。実体が伴わず急速に色あせてしまったものの，マラヤ化は1946年9月でなく43年にすでに謳われていたのである。1943年綱領のマラヤ性をもたらしたものがなんであり，なぜそれは短命だったかを，内外の資料に通暁した著者にぜひ究明してもらいたいものである。

その他，著者は『日本憲兵正史』によるとして，国民党系ゲリラ指導者（136部隊マラヤ区長）林謀盛 (Lim Bo Seng) がライテクの通報にもとづいて逮捕された，と記している（94ページ）が，同書の該当箇所には「諜者(136部隊員を指す——引用者。以下同じ)の1人李亜青(英軍中尉の階級をもつ——原注)……の自供並びに逆用工作により敵側の情報を得」て捜査を展開，「たまたまイポー南方カンパ（パの誤り）ル間の道路で検問中，支那人諜者団首領林諜（謀の誤り）盛を挙動不審で逮捕した」(注11)とあるし，当時の直接責任者たる大西覚憲兵隊長も，林逮捕はライテク情報によるものではない，と述べている(注12)。著者の誤解と思われる。

著者はまたインド国民軍について，英印軍捕虜2万人，マラヤ在留タミール人労働者3万人で構成されていたと述べている(48ページ)(注13)。マラヤで投降したインド人兵士は4万5000～5万5000人で，このうちのインド国民軍参加者数については1万人から4万2000人まで諸説ある。残余のタミール人労働者の数はこのいずれをとるかでも変わってくるわけだが，これはインド国民軍の「マラヤ性」を測るうえできわめて重要な指標だから，慎重な考証を要すると思う。

最後に，日本語（人名，機関名，書名など）のローマ字表記に誤りが多いのは，労作だけに余計惜しまれる。

（注1） Stockwell, A. J., *British Policy and Malay Politics during the Malayan Union Experiment, 1942-48*, クアラルンプール, Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, 1979年，47，76ページ。

（注2） Ahmad Boestamam, *Merintis Jalan Kepuncak*〔頂上への道を切り開く〕，クアラルンプール，Pustaka Kejora, 1972年，59～62ページ。

（注3） 以上，Cheah Boon Kheng, "Some Aspects of the Interregnum in Malaya, 14 Aug.～3 Sept. 1945," *Journal of Southeast Asian Studies*, 第8巻，1977年6月。

（注4） Cheah B. K., *The Masked Comrades*, シンガポール，Times Books International, 1979年，20～23ページ。

（注5） 上法快男編『元帥寺内寿一』芙蓉書房　1978年　523，524ページ。

（注6） 板垣征四郎刊行会編『秘録・板垣征四郎』芙蓉書房　1972年　166，167ページ。

（注7） 高級参謀だった今岡豊氏からの聴取り。1981年12月4日。

（注8） 海上鷗『馬来亜人民抗日軍』シンガポール華僑出版社　1945年12月　56～58ページ。

（注9） 『馬共言論集之一・南島之春』シンガポール　馬来亜出版社　1946年　18～20ページ。

（注10） 同上書　9，25～27ページ。

（注11） 全国憲友会連合会編纂委員会『日本憲兵正史』同会　1976年　987，988ページ。

他方，張奕善『東南亜史研究論集』台北　台湾学生書局　1976年によれば，日本軍は1944年3月23日パンコール島で136部隊後援者の亜蔡（蔡群英，村長)，隊員の李漢光（仮名・李青）を逮捕し，拷問によって蔡から136部隊に関する情報を得，李にこれを確認させた。李は軟禁中の26日に脱走，部隊に急を報らせたが間に合わず，林は27日早朝ゴペン (Gopeng) で逮捕された(393～404ページ)。李青＝李亜青だろうから，二つの記録は符合する。

（注12） 大西覚氏からの聴取り。1978年5月31日。

（注13） Cheah B. K., "The Social Impact of the Japanese Occupation of Malaya," A. W. McCoy 編, *Southeast Asia under Japanese Occupation*, ニューヘブン，Yale University, 1980年所収，113ページにも同様な数字がある。

原不二夫（アジア経済研究所調査研究部）